

## VII. イサク



エリエゼルと同様、イサクも父親の敬虔な姿からの影響を受け継いでいました。彼もまた、祭壇を築く者であり、祈りの人でした。次のようにある通りです。「主は彼に現われて仰せられた。『わたしはあなたの父アブラハムの神である。恐れてはならない。わたしがあなたとともにいる。わたしはあなたを祝福し、あなたの子孫を増し加えよう。わたしのしもべアブラハムのゆえに。』イサクはそこに祭壇を築き、主の御名によって祈った」(創 26:24-25)。

イサクが神と親密な関係を持っていたことについては疑う余地がありませんが、その祈りについてはほとんど何も記録が残っていません。イサクは神を知っていました。神の声を聞き、従い、神の祝福を体験していました。そればかりではありません。イサクは父親の祭壇の上で、自らがいけにえとして、神のご介入をその目で個人的に見ていました。これが彼にとって永遠に忘れられないことになったのは疑いようがありません。神の存在をしつこく疑うことなど、彼にとってはあり得ないことでした。神に喜ばれる祈りを捧げるといふ点において、これはなんと素晴らしい基盤となったことでしょうか。次のようにあるからです。「神に近づく者は、神がおられること…を信じなければならないのです」(ヘブル 11:6)

イサクの祈りについての聖書の記録は、一つの願いごとに限られています。だからといって、これを、イサクが継続的に祈っていなかったことを意味するものと解釈すべきではありませんが、次のような祈りです。「イサクは自分の妻のために主に祈願した。彼女が不妊の女であったからである。…それで彼の妻リベカはみごもった」(創 25:21)。ここで使われている「祈った」という言葉が示しているのは、気軽な願いという以上の意味です。これはヘブライ語の「アタル」という言葉から派生したのですが、この言葉の最も古い時代の用法は、いけにえに関係するものでした。イサクの祈りは単に丁寧な要求というだけではありませんでした。イサクは、いけにえという概念を熱心に適用しながら、リベカのためにとりなしをしました。このヘブライ語はまた、彼らの結婚と双子の誕生までの二十年間、願いが継続して、かつ繰り返して捧げられていたことを示しています。イサクはあきらめることがなかったのです。

リベカに子どもが生まれなかったことは、イサクとリベカの二人にとって、決して小さな問題ではありませんでした。リベカにとって、子どもができないということは、とりわけ重い重荷を押しつけられるものでした。当時、多くの人々の感じていたことは、不妊は神が喜んでおられないことを示しているということでした。少なくとも、彼女の不妊は、当時のあらゆるヘブライ人女性にとっての最高の望み、男の子を産むという望みを彼女から奪うものとなっていました。そしてイサクにとっては、跡継ぎがないということの意味していました。彼の心配が、父アブラハムが「あなたが子孫を私に下さらないので、私の家の奴隷が、私の跡取りになるでしょう」(創 15:3)と嘆いた時の心情とよく似たものであったことは疑いありません。そして、イサクの焼き尽くすような熱心さに向き合うとき、私たちは、人生の大きな問題といかに向き合うかについて非常に意味のある教訓を学ぶことになります。すなわち、自分のものとしての熱心な祈りこそが、神からの答えをいただく祈りになるのだという教訓です。

ここで少し脇道にそれますが、「自分の妻のために」という表現に目を向けると、興味深いことがわかります。この表現は文字通りには「自分の妻の前で直接に」という意味を表します。ここに含まれている意味は、イサクが自分たちの共通の問題についての願いにおいて、リベカと一体となっていたということです。ここに、祈りの原則として非常に重要なものが紹介されているのです。すなわち、二人という少人数であっても祈りにおいて一致するということは、その祈りの力を大いに増すものとなるという原則です。なるほど、次のように言われているわけです。「もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます」(マタイ 18:19)。

イサクの祈りについては、聖書は一度しか直接に触れてはいませんが、密かに次のような記述があり、祈りと関連した行為として考察に価する表現となっています。「イサクは夕暮れ近く、野に散歩に(訳注・原語(NIV)の引用では「瞑想に」)出かけた」(創 24:63)。ここに、瞑想の実践についての言及として、聖書の中で最も古い記述が見られます。この言葉は、後に続く旧約聖書の様々な箇所でも、神のお働きとみことばについて思い巡らすという意味を表すものとなっています。瞑想は、祈りを実質的に支えるものとなり得ます。というのも、瞑想によって、当該の問題や必要に対する認識が鋭くなるとともに、神とそのご介入くださる力とに意識を向けるところとなるからです。ダビデも「彼の神、主によって奮い立った」(Iサムエル 30:6)とあるように、大きな反対に直面した時に、瞑想に似たことを行なっています。

## ? 質問

- 1 イサクは父アブラハムからどのような影響を受け継いでいましたか？
- 2 イサクが神に喜ばれる祈りを捧げるといふ点において、どのようなすばらしい基盤を持っていましたか？それはどのような経験からですか？
- 3 「アタール」というヘブル語には、祈りに関してどんな意味がありますか？
- 4 イサクは同じことを20年祈り続けていたようです。イサクの姿から、祈りについてどのような教訓を学ぶことができますか？あなたが継続して祈っているは何ですか？
- 5 「自分の妻のために」という表現からわかる祈りの原則は何ですか？あなたもこの原則を実践していますか？
- 6 イサクは思い巡らす瞑想の時を持っていました。あなたも定期的にそのような時間をもっていますか？



主よ、定期的にあなたを思いめぐらす時間を一日の中に持たせてください。継続的な祈りを問題解決の突破口にすることができますように

祈り